

「研究者とライブラリアンとの対話：データ駆動型人文学の推進に向けたラウンドテーブル」

趣旨説明・データ駆動型人文学研究に関する共有すべき前提

菊池 信彦（国文学研究資料館特任准教授）

自己紹介

2008 年 4 月～2018 年 3 月 国立国会図書館職員

2018 年 4 月 関西大学アジア・オープンリサーチセンター

2022 年 4 月 国文学研究資料館 古典籍データ駆動研究センター兼任で DH 研究に携わる

専門は西洋史（スペイン近現代史）、デジタルヒューマニティーズ・デジタルヒストリー、パブリックヒストリー等

近刊に、ジョナサン・ブレイニー、ジェーン・ウィンターズ、サラ・ミリガン、マーティ・スティア著 大沼太兵衛、菊池信彦訳『デジタルヒストリーを实践する データとしてのテキストを扱うためのビギナーズガイド』（文学通信）

→本日のテーマである「データ駆動型人文学」を研究者自身が進めていくための具体的なステップを、研究フローに沿って解説したもので、データを使った人文学がどのようなことを考えているのかを知る上で有用



1. データ駆動型人文学とは

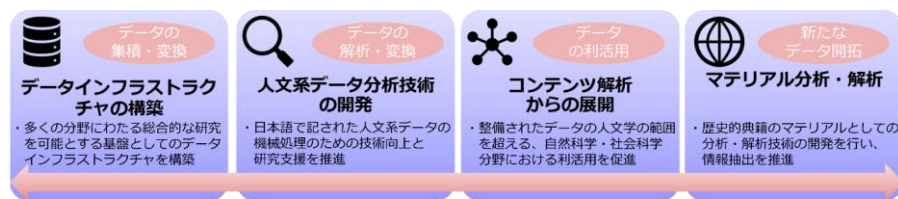
- 国文学研究資料館では、「データ駆動による課題解決型人文学の創生」プロジェクトを、「日本語の歴史的典籍の国際共同研究ネットワーク構築計画（歴史的典籍NW事業）」の後継計画としてスタート

-
- ・ 課題解決型人文学とは
-

多種多様な人の営みを対象とする学問分野である人文学の立場から総合知を構築し、人間社会の課題の解決を試みる新しいタイプの人文学。

生物、自然など、ヒト以外のさまざまなモノとも共生しうる社会、及び資源とエネルギーが循環するレジリエントな共生社会の構想を支える基盤となる。

⇒ 「データ駆動型人文学」とは、上記の学際融合研究を推進するためのデータに基づく研究活動であり、また、それを支える環境でもある。プロジェクトの具体的な研究領域は次の通り



2. 開催趣旨

・当館は古典籍とそのデータに基盤を置いているが、データ駆動型人文学は古典籍データでのみ可能な領域ではなく、様々な主題やそれにまつわる様々な人文学データが必要となる。

・データ駆動型人文学の推進において、その人文学データを管理、流通させる図書館等との連携が、これまで以上に必要かつ重要になってくる。

・しかし、DH が国内でも論じられるようになって10年以上（さかのぼろうとすれば、それ以上）が過ぎたが、欧米のようにサブジェクトライブラリアンやデータライブラリアン、あるいはDH ライブラリアン等の職位が図書館内にないこと等から、研究者との連携はあまり活発とは言い難いまま過ぎてきている。

・いないものを当てにしても仕方がない。そのため、研究者と図書館員等の文化機関職員との間で、データ駆動型人文学およびDHの推進をテーマに、直接対話を行うことで、これからの日本におけるデータ駆動型人文学の研究推進に向けた継続的な議論のための礎としたい。

3. 本日のプログラム・流れ

時間	話題	話題提供者
	司会・ファシリテータ	木越 俊介(国文学研究資料館教授)
14:00-14:10	趣旨説明・データ駆動型人文学研究に関する共有すべき前提	菊池 信彦(国文学研究資料館特任准教授)
14:10-14:25	DH研究者からライブラリアンへの期待と問題提起	永井 正勝(人間文化研究機構 人間文化研究創発センター 特任教授 国立民族学博物館／前 東京大学附属図書館アジア研究図書館 U-PARL 副部門長)
14:25-14:40	ライブラリアンからのリプライ	渡邊 由紀子(九州大学附属図書館／ライブラリーサイエンス専攻准教授)
14:40-14:55	DHとライブラリアンとの関係に関する英国の状況	堀野 和子(国文学研究資料館管理部 学術情報課 調査・管理係長 兼 データ標準化推進係長)／菊池 信彦
14:55-15:00	休憩	
15:00-16:30	参加者を交えたフリーディスカッション	皆さんご参加ください